

棚田アート制作による農地及び農村風景の新たな価値創造の試み
Experiment of value creation for agricultural landscape through an artwork on a rice field

○野田坂秀陽*、畑上太陽*、指原裕佳*

○NODASAKA Shuyo, HATAGAMI Taiyo, SASIHARA Yuka

1. はじめに

農業・農村の役割は、農作物の生産だけでなく、美しい景観、文化の継承、子供の教育などもある。しかし、近代化の進展に伴い生産以外の面での役割が薄れつつある。一方、伝統的景観や子供の教育の場が失われることに対する危機感は強いと感じる。その中で、岐阜県の古民家と棚田を自由に使える機会を得たので、特に教育に注目し、棚田を活用した形で子供が自然の中で遊び学べる場所を生み出せないか、実地調査により検討し、計画を進めている。また、情報通信技術は、通常アクセスの悪い場所にある農村を、都市など遠隔地から体験することを可能にすると考え、インターネットの活用方法についても模索した。

2. 方法

活動では、伝統的な農村景観を残す岐阜県の八百津町の山間部集落にある古民家と付近の棚田の休耕地を拠点として、地域の方々へのヒアリング、古民家の整備、休耕地の整備、イルミネーションイベントを行った。



図 1.八百津町の山間部集落

3. 結果と考察

ヒアリングでは、八百津町での活動あたって地域の魅力や地域おこしへの感度を知るために、八百津町で地域おこしに取組む方や、集落の方々を訪問し、聞き取り調査を行った。その結果、開店予定の古民家カフェが県内外から強い注目を集めていることや、町内のバンジージャンプを目当てに若者が多く訪れることなどが分かった。また、住民の方々が総じて地域の振興を強く求めていると話していたことが印象的だった。

古民家の整備では、この建物を教育活動の拠点として使用するために、使える設備の確認や掃除などを行った。茅葺屋根を残す古い構造の家屋ならではの屋根裏にたまった茅のカスの除去作業など刺激的だった。

Fig1. scenery of Yaotsu

*東京大学農学部国際開発農学専修 4 年

キーワード 農村風景、棚田、アート、イルミネーション、農地の価値

休耕地の整備では、休耕地となっている棚田をスペースとするため、休耕期間中に茂った草木を伐採した。

整備された棚田を地域の魅力発信に利用するにあたり、定期的に訪れることが困難なことから、一回の訪問期間内に実現できる利用方法としてイルミネーションを選んだ。1度学生でイルミネーションの見え方を実験したのち、近所の子供1家庭3人と親御さんを招き、簡易的なイベントとして行った。古民家にてデザイン案を参加者の子供たちと共に考えた後、棚田1枚（およそ5×15m）において、ソーラー充電式ガーデンライト36個をデザイン案に沿って並べて再現した。参加者は、楽しかったと好評だった。



図 2.草刈り中の棚田

Fig2. Rice terrace during mowing



図 3.顔のように並べた LED ライト

Fig3. LED lights put like a human face

4. おわりに

以上の活動や構想で目指すのは、「自然と人の交流拠点」の創出である。都市公園のように多すぎるルールにしばられることなく、家の庭ではできない広さと景色の中で、のびのびと遊べる場にしたい。

イルミネーションイベントは、子供にとって作品が堂々と展示される体験自体が貴重な上、自然の中で電球の設置等の作業をするということも環境教育に有意義だと考える。また、ライトアップされた棚田はwifiカメラにより動画配信サイト等で公開し、地域の人に限らず、多くの人へ景観の映像を届け、子供の自然教育の機会や棚田の維持への理解を広げたい。

その後の構想では、棚田や地域の魅力を考える会を開催したり、棚田を子どもの農作業体験用の農地にしたりする予定である。教育や棚田に関心のある方々とコミュニケーションをとることで、大学生の一人歩きなアイデアにならずに、古民家棚田の可能性をさらに幅広く模索し、農村景観保護の活性化につなげることを目指す。